すみれ

星野冴子

すみれ

　あるところに、お城がありました。そのお城には、それはそれは美しいバラの花園がありました。このお城に、ひとりの王子さまがいました。バラの花をとても愛していました。

　春になると、花園には、真っ赤なバラが咲きました。バラの花たちは、王子さまの愛を感じて、ますます美しく咲きほこります。

　そうした、バラの花たちが、美しさを競うなかで、その花園のかたすみに、ひっそりと咲く、すみれの花がいました。

　すみれの花が咲いても、そこに、すみれの花が咲いていることを、誰も気がつきませんでした。すみれの花も、美しいバラの美しさに目をうばわれました。そして、わたしは、なんて小さな花なのだろうと、思いました。

　どうして、わたしは生まれてきたのだろうと、すみれは考えました。バラの花には、美しい蝶や、りっぱな蜂があつまりました。王子さまは、そんなバラの花の何本かを、つみとり、ご自分の部屋にある、大きな花びんにいれ、バラの花の美しさを楽しまれました。

「ああ、わたしも、つみとられたい」

と、すみれの花は思いました。王子さまが、すみれの花のそばに来ると

「わたしは、ここにいます」と、さけびました。

すみれの花は、そうした声が、人に届かないことを知りませんでした。バラの花たちは、笑いました。すみれは、とても悲しくなりました。誰も、すみれの花のことには、気がつきません。

そんな時、一匹の小さな小さな蝶がやってきました。すみれの花に気がつくと、まっすぐ飛んできて、蜜をすいました。

「どうして、わたしの花の蜜をすうの？」

と、すみれの花は蝶にききました。蝶は

「どうして、そんなことをきくの？」と、言いました。

「だって、こんなに美しいバラの花がたくさん咲いているのに」

と、すみれの花が言うと、その小さな蝶は笑いました。

「あれだけ大きな花の蜜はのめないわ。わたしのような小さな蝶は、あなたのような小さな花の蜜しか飲めないのよ」

と、笑いました。それから、たくさんの小さな虫たちが、すみれの花のところに、かわるがわるやってきては、花の蜜をすっていきました。

　すみれの花は、やがて、その花びらを一枚、一枚、地面に落としていきました。それは風にふかれて、どこか遠くに飛んでいきました。やがて、すみれの花は、すみれの花でなくなり、小さな種をいくつも実らせました。

　すみれは、その命の終わりに、こう思いました。わたしは、小さな虫たちのために、花をさかせたのだ。バラの花のように美しくなって、王子さまを喜ばせることは、できなかったけれど、わたしには、わたしが生まれてきた理由が、ちゃんと、あったのだ。そのわたしのなすべきこ

わたしには、わたしが生まれてきた理由が、ちゃんと、あったのだ。そのわたしのなかで、ことを、その使命をはたすことができたのだ。

すみれの種が、地面にこぼれていきました。すみれは、とてもとても、しあわせでした。

すみれ

http://p.booklog.jp/book/73382

著者：星野冴子
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/saeko321/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/73382

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/73382

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ